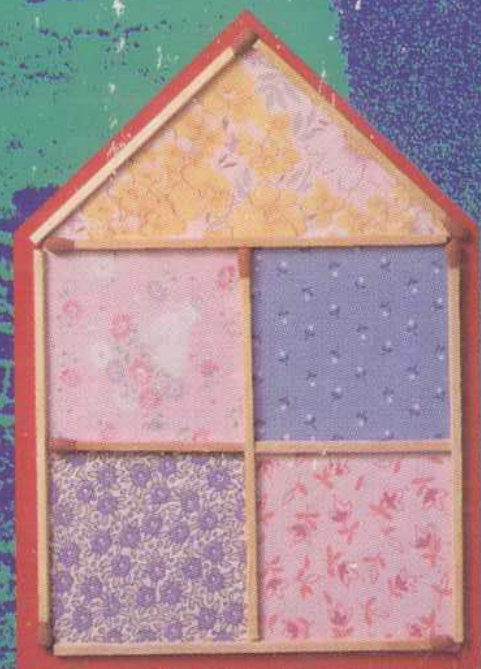


山田太

山田太 流るる家

崖の バルコニー



角川文庫

ましべ
岸边のアルバム

やまだ たいち
山田太一



角川文庫 504I

昭和五十七年六月二十日 初版発行
昭和六十三年十二月二十日 十五版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集部(〇三)八一七—八四五一

電話 営業部(〇三)八一七—八五二一

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——千曲堂製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

岸辺のアルバム

山田太一



角川文庫 504I

目次

はじめの波紋	五
扉をひらく	三
真昼のさざめき	三九
昨日の夕暮	四四
知らない空	四四
冬のヨット	一〇三
体験	一九
風の裏側	一三三
反響	一五三
律子の遍歴	一七〇
空罐 あきかん のこだま	一九四
寒い春	二二七
紙の迷路	二三八
静かな日曜日	二六八

ロボットの世界

葉 桜

澱^{よど}みの中で

品川埠頭^{ふとう}

五月の荒野

夏沈む

雨の来る前

氾^{はん}濫^{らん}

それからの岸边

解説

二八四

三〇七

三二五

三三七

三七一

三八七

四〇七

四二六

四五〇

大山勝美 四六〇

はじめの波紋

「カテイチョウサ？」と則子^{のうこ}はきいた。

「そうです。家庭調査センターです」と電話の男がいった。「無差別抽出^{ちゅうしゅつ}で、お電話しています」

「どんな事でしょう？」

そこまでで則子は、もう嘘^{うそ}を感じていた。男の声に不真面目^{ふまじめ}なところはなかった。落ち着いた低い声で知的な匂^{にお}いがあった。しかし、仕事であちこちにかけている声ではない。電話のベルで則子が出ると「田島^{たじま}さんでいらっしゃいますか？」と男はいった。その声がすでにドキリとするほどひそやかだった。思い切って男が女にかけているところがあった。

「現在の場所に、何年前からお住まいですか？」

「九年とちょっとかしら」

「お住まいの種類は——その、たとえばマンションであるとか」

「一戸建です」

「御家族の構成は？」

「主人と子供ふたりです」

「お子さんは——つまり、お嬢さんであるとかいうことですが」

「上が女で下が男です」

「上がお嬢さん、下が坊ちゃん」

男は書きとめるように、小さくくりかえした。電話の向こうは静かだった。男のいう通りなら、他の社員がかかる電話の声があってもよかった。

「御主人は、どういう方面のお仕事でしょうか？」

「会社員です」

「会社員——」

男は、また書きとめるように黙った。「忙しいから」と切ってしまう方が自然な気がした。しかし、則子は切らなかつた。

「おそいんでしょうね、つまり、お帰りがということですが——」

「ええ。商社なものですから」

「商社へおつとめですか？」

「ええ」

「へえ——」

自分より若い男を則子は感じた。

「それでですね」

「ええ——」

短く迷う気配があつた。

「浮気のお相手は何人ぐらいですか？」

「え？」

「浮気の相手です。奥さんの浮気の相手です」

口早になるのを押さえているのが分かった。息づかいが聞こえた。

「秘密にしましょう。人妻の七〇パーセントは浮気をしています。私は何人だって、おどろきませんね」

則子は切らなかつた。

「いかがです？ 何人のひとと経験がありますか？ 何人の男とやりましたか？」

男の声は少しふるえた。何故切らないのだろう、と則子は自分で思った。

「数えているんですか？」

男は座^{けいれん}する^{あらが}るように短く笑つた。則子は黙っている。その沈黙に忽ち追いつめられたように、男は抗うような声になつた。

「五人か十人か知らないけど、奥さんの知っている世界など、たかが知れてると思いますね」
受話器を耳からはなした。「奥さんは何も知らないと思うな」切りぎわに、そんな声が聞こえた。

カナリアが鳴いている。細カナリアである。

十月だった。あたたかいよく晴れた日で、あけはなしたガラス戸に近く鳥籠とりかごを置いていた。掃除を終えたところである。小さな庭にベゴニアが数株、地味じみな花をつけている。

庭の向こうは低いブロック塀べいをへだてて多摩川たまがわの堤防であった。

高い緑の土手どてで、居間にいると、視線の八割が土手の緑であった。その上は空である。土手の上を歩く人は、青空、曇り空、雨雲を背景にして、舞台の上の人物のように田島家階下の視野を横切って行った。

二階へあがると、多摩川が広々とひらけた。

対岸は川崎市かわさきしである。登戸のぼりとの家並やなみ、向ヶ丘むこうがおかの丘陵きゅうりゅうが見渡せる。

川音は殆んど耳に入らない。よく聞く音は、やや上流にかかる小田急おだきゆうの鉄橋を渡る電車の通過音であった。

どうして平気なのだろう、と則子は思った。いたずら電話である。セックスについて露骨ろこつない方をされた。

前にもそういうことがあった。この家ではない。前にいた下北沢しもきたざわのアパートで、部屋に電話をひいた数日後に「いまひとり？」と中年男の声でかかった。

「いけないなあ、自分でそんなことをしちゃ。教えてあげるよ、私が。駄目だめ駄目だめ脱だめがなくなっちゃ。スカートをはいたまま手を入れたら皺しわが寄るじゃないの」

その時は数か月たって、思い出すと記憶を押しやりたい気持ちになった。年のせいだろうか。あの時が二十七、いまは三十八である。

「図々しくなったのね」と呟いてみる。

でも男を怒鳴りつけるほど図々しくはなっていない。黙って聞き、黙って切った。そのころは十一年前と同じである。四十歳になるには、まだ三十九歳の一年と三十八歳の三か月と十数日がある。まだそんなに中年というわけではない。

声だわ。むしろ声だわ、と則子は思った。

声が前とちがっていた。前の男は猥雑さが唾液のように声を濡らしているという気がした。いまの男は、そうではなかった。かまえた低い声も、自分の言葉にうろたえたように、やや高く若さを露わにしかけた時も、育ちのよさのようなものがあつた。いい声といってもいい。魅力があつたといつてもいい。

則子はひとりで小さく苦笑した。

男をほめている、と思った。洗面所の鏡の前に来ていた。

「バカみたい」

甘えた声を出し、鏡の中の自分につくり笑いをした。横顔になる。背筋をのばしてみる。正面になる。微笑して、首をちょっと曲げて、はずかし気な表情をしてみる。ひとりである。なにをしても自由だった。

「何人の男とやりましたか？」

電話の男の声を真似て、則子は鏡の中の自分を真顔で見つめた。

日が落ちて律子^{りつこ}が帰ってくる。

「やあね、はしゃいでるの？ お母さん」

電話のことを話すと、にべもなくそういった。

「はしゃいでるわけないでしょう」

「でも嬉し^{うれ}そうに話してたわ」

「すぐそういうこというんだから」

二人だけの夕食だった。

「明日吉祥寺^{きちじょうじ}でコンパをやるんだけど、スコッチ一本貰^{もら}っていいかしら？」

「なんのコンパ？」

「何度もいったじゃない。ホンケンよ」

「ホンケン？」

「翻訳研究会よ」

「駄目。お父さん大事にしてるんだから」

「のまないじゃない」

「普段はのまないわよ」

「それがいやらしいのよね。飾っ^{かざ}って国産のんでるなんて、ずれてるわよ。スコッチなんて
どどん安くなってるのよ。大体お酒を棚^{たな}におくってというのが分からないわ。日本酒の一升瓶^{いっしょうびん}ズ
ラリと飾っておく人いるかしら？ 洋酒だと棚におくっていうの、本当にへんな趣味だと思う

わ」

「居間におけば変だけど、食器棚ならおかしくないわ」

「のまないで見えるところに置いとくっていう根性がいやなのよ」

私立大学の英文科一年である。成績は小学校からよかった。この半年ほどで、みるみるあかぬけて美しくなった。自信があり、人の話を聞こうとしない。若さの只中ただなかにいて、自分のことで頭がいっぱいで、どんな人情も必要としないという風に見えた。鼻息が荒くて、今のこの子には何をいっても無駄むだだという氣に、よく則子はなった。

「いいわ、お父さんに直接交渉するわ」

謙作けんさくは断れないだろう。ついこの間は、福岡に転勤する部下に一本包んだ。この数年、海外出張がなくなっている。国内の繊維機械担当部長になり、前ほどブランドーもスコッチも補給がきかない。のまずに、なにやかやとなくなっていくのだった。

繁しげるの帰宅は八時半である。八時まで塾へ行っていた。高校三年の秋だ。学校の帰りに、ハンバーガーやラーメンで軽く空腹をなだめ、帰ってからちゃんと食べるという日が週四日組みこまれていた。

「レーシング・カーってお母さん知ってるでしょ。鈴鹿すずかとかなんとかでガッってやるやつ。あれのドライバーなんてのはさ、すごく貧富の差が激しいんだって。だってほら、マシンだから金がかかるでしょ。だから、本当にマシンが好きで、修理工場なんかにいてさ、段々ドライバーになったやつと、金持ちの息子むすこなんかで、ドンとすげえの親に買わせてドライバーになった奴と

いるわけよね」

「もう少し綺麗に食べて頂戴」

「そういうのが一緒に走るでしょ。あいつやっちまおうかってさ、悪いのが走る前にゴチョゴチョっていうんだって。それで金持ちの息子のを、二、三台でひっかけに行くわけよね。ガーッ、ガガガッって、横からせまったりさ。こりゃ怖いよね。下手すりゃ死んじゃうんだからさ」

「本当にお魚の食べ方、小学校の頃から変わらないんだから」

「一度ほんとに見てみたいなあ。事故おこして、キュルキュルひっくりかえって、ブワッって燃え上がってさあ」

繁には律子のように、意地の悪いところはなかった。気が好くて、帰ってくると一日のことをよくしゃべったが、これも母の話をきくというところまではいかなかった。成績は中以下で、国立は勿論、私立もかなりランクを落とさなければあぶないといわれていた。しかし、本人はそんなことでもあまり悩んでもいないように見える。食べながら、しゃべりたいことをしゃべりまわると、留守中にタイマーで録音していたFMの音楽を確かめに二階へ駆け上がり、ボタンとドアが閉まった。

あとは謙作である。

十二時までには待つことにしている。すぎると床に入った。起きていてもいいのだが、謙作が寝ている、という。待っていると思うと、歯切れのいい仕事が出来ない、という。夜中までなにが仕事かと思うが、今日はのみたくないといい、事実朝から疲れた顔で出て行きながら、夜半まで

帰らない日が続くと、好きなだけではないのだ、と思う。契約をとるのに、酒をのみ麻雀をしなければいけないとは、やりきれないことだと思うが、どこまでどうなのか則子には分からない。仕事の話は謙作はしなかった。家に持ちこまないのが男らしいと思っているふしがある。

そのかわり家のこともごたごた耳に入れるな、というのだが、それでは夫婦で黙りっこをしているようなもので、なんのために一緒にいるのか分からない。そういうと、「気分のいい話をすればいいんだ」という。

繁の部屋があんまり汚いので掃除をしようとする。「いじらないでっっていつてるじゃないか」と怒る。そんなら自分で綺麗になさい、というとなんか分かった、という。いうだけでちっとも綺麗にしない。「お父さんから、なんとかいって下さい」というような事はいうな、というのである。

「気分のいい話なんて特別ないわ」

そういう返すと、黙っていた。面白くない顔をした。それから数日後、酔って帰ってタガがはずれたように反論をはじめた。

贅沢ぜいたくをいうな、というのである。一戸建てに住んで内職もしないで子供に手もかからず、亭主のつき合いの苦勞にもまきこまれず、カナリア相手に暮らして、気分が悪いとはなんてエいい草だ。「拾えよ。俺おれが上衣うわぎを脱いでほうったら、すぐ拾えばいいだろ」

則子は拾った。こういう時は、さからわないことにしている。

同じ管理職でも、一、二年前に漸くようやマンションを買い、その返済に奥さんは会計事務所のパートへ行き、その上その奥さんは、森岡もりおか常務が亭主の昇進の鍵かぎだと判断すると、私宅の網戸の取り

はずし、水洗いにまで行っている、という。

「そんなことをしろ、といってるんじゃないぞ。そんなことは、俺の生き方に反する。単に効果の点から考えても、あのかみさんは、見当ちがいの努力をして、亭主の足をひっぱっている」しかし、お前が現状に不満だ、というのは贅沢だ。それだけはいっておく。それは精神の貧しさだ。俺がお前だったら、もっと豊かな生活をしてみせる。レコードを聞いたっていい、本を読んだっていい、展覧会へ行ったらいい。お前は何をしている、何をしてるんだ、とめずらしくしゃべった。

その謙作が、今日は十時すぎに帰った。

酒の匂いがなかった。

「お帰りなさい」

「ああ」

疲れた顔で謙作は寝室へ行く。

早いね、といいかけたが、言葉に気をつけなければいけない。皮肉にとられると困る。十時は謙作の帰宅時間としてはたしかに早い。しかし、多くの家庭の常識からいえば、決して早いとはいえない。恨みがましくとられるのはいやだった。

「お風呂があるわ」

「ああ」

上衣をとり、ネクタイをはずす。拘束をはぎとるように、ワイシャツを脱ぐ。則子は、さめか

けている風呂の火をつけに行く。

「明日、八時十二分のひかりで大阪だ」

「そう」

「三泊だ」

裸になると謙作は則子を追うように風呂場へ来た。

「ちょっとぬるいわ」

「いいよ」

身体からだもしめさずに湯船にとびこむ。

「ぬるいな」

乱暴に湯をかきまわした。

「だからいったのに」

則子は笑った。謙作は笑わない。両手で湯をすくい、顔に激しくかけると、何度か荒っぽく顔をこすった。かつては男らしかったそうした仕草が、いまは疲れた男の神経的な動作にかわっている。

「北陸を回るかもしれない。そうなれば、五泊ぐらいになるだろう」

絹糸系繊維の産地が北陸に集まっている。福井には、ナイロン、ポリエステルポリエステルの工場もある。

繊維機械販売にとっては、北陸は重要な戦場のひとつであった。

「背中、こすってあげましょうか」